



おと
弟妹
いも

女体化した弟は
俺の弟で妹で恋人でそして嫁

オリジナル
TS女体化
CG集

おと
弟
妹
いも

女体化した弟は

俺の弟で妹で恋人でそして嫁。



おと 弟 妹

このたびは
『弟♥妹』
をお買い上げいただき
ありがとうございます

『弟♥妹』には
にいの目線で話が進む
『お兄ちゃんパート』
と
ボクの目線で話が進む
『弟ちゃんパート』
があります

『優君』
性別は今のところ男の子
お兄ちゃんが大好き
にいと結婚するのが夢
最近オナニーを
覚えたもよう



『お兄ちゃんパート』
↓
『弟ちゃんパート』
の順で見るのがおすすめです

『にい』
病的に弟が好き
でも優君は男の子
だから手は出さない
きっと出さない…
出さずにいたら
いいなあ……
いやしかし…
少しくらいなら…
いやいやでも…
あるいは…



え？
ボクの自己紹介ですか？
えっとボクは『優』と言います
にいのことが大好きです
にいてのはお兄ちゃんのことです
にいのどこが好きかと言うと……
まずカッコよくて… 優しくて…
あと走るのもすっごく早くて…
いつもボクの宿題を見てくれて…
なでなでしてくれると嬉しいし…
ホと笑顔がフニオだし… それに

『田中』
隠れキャラ
そして元凶



おと
弟
妹
いも

女体化した弟は

俺の弟で妹で恋人でそして嫁。



「はい助けてえ……」

可愛い声で助けを求めているのは俺の弟の優君である。
特徴は ①純真 ②可愛い ③ウルトラ可愛い
血が繋がってなかったら間違ひなく手を出していただろう
血が繋がっていても妹だったら確実にイタズラしていただろう
神の設定が少し狂っていたら性犯罪者の道一直線だったせ……
しかし今日の優君は色っぽいな……いつもの5割増してさ……



「どうしたんだい優君？」
焦りを感じ取られてはいけな……

「コーヒーを飲んで落ち着こう……
カフェインよ俺に力を！」

「はい……僕……僕……」

「大丈夫だよ優君 落ち着いて」

「おなにしたらオッパイが生えちゃったのっ!!」

プ——ッ!!

「ななな……なんだって優君!」

「思わずコーヒーを吹き出してしまった……」

「白いおしっこが出たらね……おっぱいが……」

ゆ……ゆゆ……優君におっぱいっ!?

てか優君オナニーなんてしてたの!?

いや……そもそももう精通してたの!?

ふう……落ち着け俺……落ち着くんた……

「と……取り敢えずおっぱいを見てみようか……」

「ね……おっぱいあるでしょ……」
うおおおおおおっ！
小ぶりながらも僅かにぶっくりとしてるおっぱい……
マジでおっぱいじゃないですか優君っ!!
「ご……」クリ……
触りたい……つまみたい……なめたい……しゃぶりつきたい!!
「ねえにい……僕病気のかなあ……?」
ますい優君が不安になっている……落ち着かせねば……!



「大丈夫だよ優君！思春期は誰だってそうさ」
「兄ちゃんなんて巨カップになったもんさ！」
「そうなんだ！よかったあ……」
ああもう優君は天使だな！なんでも信じるんだから！
「優君……下の方はどうなってるのかな？」
「下っておちんちん？見てないからわかんない……」
「そうかなら兄ちゃんも見てるから確かめてみよう」
よし！自然な流れ！これで優君の可愛いアレを見れるぜ！
「え……? いも見てるの……? それはえっと……」
「これは診察です！さあ優君 兄ちゃんに見せてみなさ」
「うん……わかったよ じゃ……」

くっー優君ちゃん可愛いっ!! 更におっぱいとかもっ!!
「あう... ちょっとだけ小さくなっててもかも...」
「そうかな? 前に風呂で見た時はこんな物だった... んっ!!」
「小さくて分かりづらいけど... 優君もしかして勃起してる!!」
「そ... それは... 正しい... 見てるから...」
「え? 俺が何?」
「もお... そんなのいいでしょ! 正しいバカ...!」
え!? 俺が何なの!? ああもう! 怒ってる優君も可愛いなっ!!



「おえに... もうパンツはきません...」
「それをしちゃうなんてんでも無し...」
「じゃなくて... えっと...」
「ダメだ! 何とかして優君のちんちんを出したままに...」
「よし優君! オナニーをしてみよう!」
「え!? お... おなに... な... なんて...」
「おっぱい出現の条件がオナニーかどうかを調べるには」
「もう一度オナニーをするのが一番なんですよ優君!」
「だから別に兄ちゃんが見たいってわけじゃないよ...」
「実験と検証なんだよ優君! だからさあオナニーを!」
「さあ! 兄ちゃんが見てあげてるから! さあ! さあ!!」
「うん... わかったよ... 僕のおなに... 見せておくれ...」
そりゃもう見るよ! 見まくるよ! 脳内H回に保存するよ!!



「あんっーにっ……んっーにっ……」
 「にっ……あっーにっ……にっ……にっ……」
 おおおお!!俺のてを呼びながらとか!!
 可愛すぎるっ!!エロ過ぎるよ優君っ!!

「あっ……にっ……はためたよ……」
 ちよ!想像の俺は優君に何をしてくれるの?
 「んっ……にっ……にっ……すびさ……」
 「ゆ……優君っ」
 「にっ……すびさ……あっ……だるすびさ……」
 「あっーにっ……てちやうよ……」
 「あっーあんっーにっのちんち……」
 「えっ……ちよ……!!ゆ……優君っ」
 「だめえ……白おしっこてちやう……」
 「ボクのちんち……にいのちんち……」
 「あっ!あっ!てるう!てちやうっ!!」
 「んんんっ……!!」

「あんっ…… あう…… はあ……」
「いっばい出したね優君 気持ちよかったのかい？」
「うん…… 正しいが見てたからかな……」
「いつもよりおしっこいっばい出ちゃった……」
「ああもう可愛いな優君は！ おしっこ精液だから！！」



「それにしても優君…… オナニなんてどうして覚えたんだいの？」
「えっとな…… クラスの女子のたなかさんに教えてもらったんだ……」
「はよ…… 女子が男子にオナニを教えるだ…… 何 たなか……」
「好きな人のことを考えながらちんちんをこすすしたらいらっ……」
「こすすがよくわかんなかったからくにくにしてるの…… 変かな？」
「変じゃないさ…… 優君らしくてすごくかわいかったよ！」
「可愛すぎて動画で保存したかったくらいだよ！」
「あ！ なんてしなかったんだ！ しっじった！！ 俺のアホっ！！」

「おっぱいの大きさを変わらなかったねに……」
「そうだね……残念だね優君……」

「……もうと大きくなるかと期待してたのに……」

「にいごめんね……にいのベッドおっして汚しちゃった……」

「全然構わないよ優君！優君が出した物に汚い物なんて無いからね！」

「言うか兄ちゃんむしろ飲みたいくらい……」

「え……にいボクの白いおっして飲みたいの……」

「へっ……っ！興奮して口を滑らせてしまったっ……!!」

「白いおっして飲むの……あ……でも……」

「ん……どうしたんだい優君……」

「にしもおなにいしたおっして出るとはね……」

「そりやあもちろん！優君の10倍は出るっ!!」

「そんなにい？まさか……やっぱりにいの想像……」

「ま……まさかこんなことで尊敬されるんは……」

「ボクね……ちょっとだけ想像したの……」

「にいがおなにいして白いおっして出ると……」

「……「体どんなのを想像してるのだから……」

「ボクもちょっとだけ……飲みたいかなって……思ったかも……」

「まじですか優君!?じゃあ飲もう！直接飲みましようっ!!」

「えあ!?ちょくせつ!?にいのちんちんからそのまま飲むの……」

「そうです！兄ちゃんのちんちんを啜えて直接飲むのっすっ！」



俺の弟が
萌え萌え可憐

「ほわ… 可愛いちゃんち… えっと… どうしたらSOSERS…」
「そうだね優君 まずは舐めてみようか」
「う… うん… 可愛いちゃんちをなめる… ほう…」
ああ… 弟が… 優君が俺のちゃんちを舐める…
うむ… 優君の可愛い舌が俺のちゃんちを…
「いいよ優君… 兄ちゃんのちゃんちほどんな味だよ」
「えっとね… なんだろ… 可愛い味って感じかなあ」
お… 俺の味!? それってどんな味なの優君…!?

「おれじゃあ舐えてみようか優君 っはなからさ」
「う… うん… やってあげる… ねえどろ…」
「うまくてきなかったら… ねの… じぶんお…」
くはっ!! ゆ… 優君!!
「ん… おっぱ… なんだ…」

ん



「んっ… おくちのなかに入っちゃった…」
 ああ弟に… 優君にちんぽを挿えさせている…
 「ねえにい… ちゃんときもちい…」
 「勿論気持ちいいよ… ちんこが溶けそうだし…」
 「えへへ… もっと気持ちよくなってねえ…」
 「うあ… そんなこと言われたら優君…!!」
 「ふふ♡ 気持ちいいのにい？ 気持ちよくなってねえ♡」
 ゆ… 優君!? もしや意外と小悪魔!? うあ…!!

俺の弟が
 萌え萌え 必然

「出るー 優君は出るよー 精液出るよー」
 「んっ… ーんっ…」

うあ… 弟にフェラをせしめる背徳感…
 射精が… 止まらな…
 「優君！ 無理だったの離してさからあー」
 「ん… ーん…」

うあ

うあ

うあ



「あう……ちょっとぼしちゃった……」
「ごめんね……全部飲めなかった……」
「十分だよ優君!! よく頑張ったね……」
「不味かったらベツしてくれていいんだよ」
「んーん……にいのえっと……せいえきゅ」
「ボクね……きらいじゃないよ……」
ゆ……優君!! もう! なてなてしちゃう!!

「えへへにいのなてなて大好き……♡」
「ねえにい……ちんちん気持ちよかったなら」
「ボクまたお回おなにいしてあげるよ……」
「うう……優君……君って子は……!!」
「そしたらにいまたなてなてしてね……♡」
「実は優君もって気持ちいいのがあるのです」
「それはちよっと痛いかもしれないが……」
「痛い……? でもにい気持ちいいんだよね?」
「にいが嬉しいことなら……ボク頑張れるよ!」



「あっ！」「え……何してるの……?」
「だめだよ……そこお尻の穴だよ!?」
「優君はお尻の穴まで可愛いねえ」
「あんっ！」「え……だめだってえ……」
「優君 お尻 気持ちいいかい?」
「そんなことお…… あんっ!!」
「これからね 優君のお尻の穴に」
「兄ちゃんのちんちんを挿れるんだよ」

「あんっ！」「え……兄のちんちんを……?」
「だからちゃんとするほうに挿れようってんだ」
「あっ！そっ触っちゃ……んっ……んあっ!!」
「にい……ボクのお尻でおなを挿するの……」
「違うよ優君 これからするのはセックスだよ」



「せつくす……おなはらとは違ひの……」
「セックスはね好きな人同士でする愛の行為なんだよ」
「え……す……好き……あひ……」
「分かるかい？ ちんちんがお尻の穴に当たってるの」
「うあ……ちんちん……すごいあついよ……」
「兄ちゃんは今 優君への大好きって気持ちを全部」
「ちんちんに込めているんだ それを優君！」
「お尻の穴で全て受け止めて欲しいんだ!!」
「え!? ええええええええ!!」

おしり

「えあ……でもはら……これって多分えりど……」
「よく分かんないけどイケナイぞ……だよあ……」
「正直どうです！ 兄弟でしちゃダメなことです!!」
「そ……そうだよあ……でも……はら……」
「うん！ ずっと前からしたらいって思っていました!!」
「……ん……そっか……そう……なんだ……」
「はら……ボクもね……大好きだから……」
「だから……いいよはら……しても……」



ああ……優君とセックスが出来る！アナルセックスを……!!
「ほら優君わかるかい？」
「兄ちゃんのちんちんが優君のお尻の穴とキスしてるよ」
「ねえにい……ほんとにおしりに入れちゃうの……？」
「こんなのしていいの？おまわりさんに怒られな？」
うぐ……ほんとにいいのか俺？引き返すな……
「ぶにい……おしりの穴のちんちん……」
ここで止められるわけあるかあああああああああ
「例え逮捕されようと兄ちゃんはやめせんっ!!」

「ほあ……ああ……！ちんちんきちゃう……!!」
んあ……亀頭が入った！なんだこの尻穴……
キツキツなのに優しく包み込まれて……!!
「ゆ……優君大丈夫かい？いけそう？」
「んっ……えへ……だいじよぶだよに……」
「にいのちんちんでお腹一杯だけ……平気だよ……」
「これから動かすからもっときついけど大丈夫かい？」
「うん……こんなの初めてだけどだいじよぶだよ……」
「えへへ……だって……にいのちんちんだもん……♡」
ゆ……優君！天使すぎるよ優君……!!
「ごめんね優君！兄ちゃんもう止めらそうにない!!」





「んちゃっ♡ にちめらよめ♡」
 「にゃんかあ♡ へんちよめ…」
 「あたまがぶるぶるして…」
 「おしりがっ♡ こわれちゃ♡」
 「優君イクのかい♡ イクんだね♡」
 「にゃっ♡ スムン♡」
 「兄ちゃんももうすぐイクかな…」
 「あとちょっとだけ我慢してね…」
 「そしたら一緒に♡」

「にゃんかわかん♡」
 「うん♡ わかったよ♡」
 「あにゃっ♡ れもごちがな♡」
 「あっ♡ は♡」
 「おしり♡」
 「にゃのちんちん♡」
 「よっ♡ イクよ優君♡」
 「うん♡」
 「優君大好きだよ♡」
 「うん♡ ポクも♡」

「にゃんかあ♡」
 「あたまがぶるぶるして…」
 「おしりがっ♡」
 「兄ちゃんももうすぐイクかな…」
 「あとちょっとだけ我慢してね…」
 「そしたら一緒に♡」

Handwritten signature in blue ink.

Red handwritten text at the bottom right.

ああ。。。優君の中に射精した。。。優君を精液で汚した。。。
「はにゃ。。。中になんかいっぱい。。。はあ。。。」
「しゅごいねに。。。これがイクならね。。。」
「。。。ごめんね優君。。。」
「え。。。に。。。なんれあやまるの。。。」
「我慢できずに優君を汚してらびわるもじちゃった。。。」
「らいじよぶらよに。。。にの気持ちほわかってるよ。。。」
「今ボクの中はね。。。にの大好きれいっぱいならよ。。。」

「ゆ。。。優君。。。」
もう！とんだけ天使なの君は!?

「じゃあ抜くよ優君。。。」
「んっ。。。に。。。ん。。。」
「あんっ。。。ん。。。」
「にちゅ。。。ちからほいんにゃいちゃ♡」
「優君のお尻の穴最高に気持ちよかったよ♡」
「んへ♡えへへ。。。よかった。。。♡」
うわ。。。優君のアナルはっくり開いて。。。
「くり。。。またしたくなってきたぞ。。。」
「て。。。ん。。。あれ。。。え。。。」
「どうしたのにい？あ。。。またするの。。。」
「もちろんしたいけど。。。じゃなく。。。」



「優君のちんちんが…無いっ……!!」
「えあっ!? ほ…ほんとだ…!?」
「ち…ちんちん無くなっちゃった…」
「おえいいい…ど…どうしようも…」
「おっばいもまた大きくなったっ…」
「はわ…あう…ん…ん…ん…」

これはもしやアナル射精しちゃったからか…?
としたら完全に俺のせいじゃないか…!!
「えっと…優君落ち着いて…」
「そうだ落ち着くんだ…よく考えるんだ…」
「ちんちんが無くなって…だからえっと…ん…」
「あれ…?別に無くてもいいんじゃない?」
「と言うか優君さえ納得したら無い方が良くないかね?」
「となるとなんとかして優君を納得させねば…」
「ちんちんなんて無い方が良いと思わせるのだ!!」
「よしー優君ー」
「え…」
「取り敢えずこれを着ましようっ!!」



「に……に……なにこれえ……」
「ボク男の子だよ……こんなの変だよ……」
「優君はおっぱいがあってちんちんが無いんだよー」
「もう優君は女の子なんだよ！だから変じゃないよ!!」
「でも……でも……ボク……男の子だもん……」
「似合ってるよ優君！可愛さ3倍！いや百倍だよ!!」
「ん……でも……やっぱり脱いちゃう……」
あ……あれ？褒め殺しが効かない……



「だってこれ……にいのカノツヨの人の服でしょ……」
「え……んや？えや？彼女……」
「こんなの持ってるってことは……そうなんだよね……」
「ボク脱く……こんなの……やだもん……」
「いやいや！いないから！恋人とか彼女とかいないからね!!」
「うそ……だってにいかって良くて優しいもん……絶対いるもん……」
「いるわけ無いよ！兄ちゃんが好きなのは優君だけなんだから!!」
「えう……に……ん……ん……ん……」
「本当だよ！この服は優君に着せたくて買ったものだよー」
「優君が女の子になって兄ちゃん超ラッキーだと思ってたわー」
「て言うかこれ優君をお嫁さんにしてさるとか思ってたんだよ」
「に……に……おめでとう……さん……ボクがにのお嫁さん……」

「優君 ちゃんとパンツも履いたのかな？ スカートをめくって見せてもらえん」
「ん… これいいのよ…」
おお… 優君がおんなの子パンツを… 出え… エロすぎる…!!
「ん… そんなに見なさん… はすかしも…」

ん

ん

ん



「凄く似合ってるよ優君… 超かわいらしい」
「か… かわいらしい… あっ… かわいらしい…」
「あれ？ 優君少し濡れてきたねえ…」
「え… めれるってなぬん…」
「優君がエッチな気持ちになったってことだよ」
「かわいらしいって言われて嬉しかったのかな？」
「それともパンツを見られて興奮してるのかな？」
「あっ… そんなに…」
「う… も… なの…」

「あう……！なにしてるのい……!? ちんちんめないてえ……」
「ちんちんじゃないよ優君……ここはおま○こだよ」
「あんっ♡お……おま○こ………」
「優君のエツチで敏感なおんなの子の部分だよ……」
「い……だめたよお……んあっ♡そこはめ……」



「うわ……！なんだこれ……優君の愛液甘くないか……?」
「元弟で現妹の愛液ってこんなにも美味しい物だったのか……!?」
「体力が回復しそうだぜ……！これはもはやポーション……いやエロクサー!!」
「んにゃっ♡やだに……ポクのおしっこ飲んじゃだめたよお……」
「これは優君のエツチなお汁だよ……溢れて止まらないね……」
「優君はエツチでイクナイおとこの子だったんだね……」
「あんっ♡だっ♡だっ♡い……い……ん……ん……なめてくれるんだもん……」
「いいんだよ優君 いっぱい濡れなさいと兄ちゃんのちんちんが入らないからね」
「え!? いのちんちんいれるの……? そっか……いれるんだ……♡」
「優君のおま○こに兄ちゃんのちんちんを挿れて恋人セックスするんだよ!」
「こ……恋人!? ほ……ポクとにいが……恋人……♡」

「優君のセックスは…」
「…ん…♡」



「初めての恋人セックスは痛いけど我慢できるかな…」
「せつくすてきたらボク…にいと恋人になれるんだよね…」
「だったらボク…痛いなんて我慢できるよ…♡」
「うう…ゆ…優君…!!」
「あ…どうとう出来る！優君との恋人セックス…!!
今まで何度夢に見…何度夢精したことか…!!」

「あうっ♡ にいのちんちんが… あんっ♡」
「かららひらいちやうよお♡ あほおっ♡」
「大丈夫かい優君？ 平気？ いけぞうっ♡」
「だいじよぶだよ… にい… らげろ…」
「痛くないける… なんかに変になりそ…」
「頭のなか… にいとちんちんらげれ…」
「ほかのが無くなっちやいそなの…」

「それですんだよ優君」
「おま○こ集中して兄ちゃんだけを感じればすんだ」
「うん♡ わかったよにい…♡ さっすっ精母♡」
「それでボクの中をにいのちんちんらげれ♡」
「するよ優君！ 優君を兄ちゃんの物にするからあお」
「よじー 動くよ優君ー」



「あんっ♡ ぽくがボクの中に入ってるよぉ♡」
「ちんこが奥に当たってる……ぞろか……」
「優君のおま○こはまだ子宮ができてないんだな
しかし優君ま○こ凄いなー絡みついてるー」
「弟のおま○こに挿れてるってどう倒錯感……」
「背徳感……溶けて射精してしまっそうだ……」
「はっ♡ ぽくのちんちんおびきすきだよぉ♡」
「からちの中……ちんちんれいっばいだよぉ♡」

「そんなに気持ちいいのかい優君!? 兄ちゃんのちんちんが……」
「うんっ♡ きもちいいよぉ♡ ちんちんちんちんもん♡」
「やっぱりボクのおま○こ♡ ぽくのちんちん好きなの♡」
「はっ♡ すき♡ らいすき♡ ぽくのちんちんれいすき♡」
「もぉ! 優君は! 純粋なのにエロいとか! このイケナイ子め!」
「うん♡ ボクいけない子なの♡ ちんちんもっとなんてめっしてえ♡」



ぽく♡

ぽく♡
ぽく♡

「初めてなのになんかすんなり受け入れて……」
「男の子なのにおま○こでイクっ……」
「このしけないうめー。しけなうH回ま○ん」
「あんっ♡ちっっえ♡しけなうすきなんちゅんっ♡」
「んじゅああっ♡しけ……♡ちゅえ♡とげちゅうよあ……♡」
「イクのか優君？おま○こで……俺のちんちんで……」
「うんっ♡いっちゅうよあ♡さっきよりす○のきちゅうっ♡」

ああ！優君が俺のちんちんでイク……！
男の子なのにおま○こでイクっ……！
血の繋がった弟なのにな……！
女の子になっておま○こでイクっ……！！
弟が真正銘心までオナナになる……！
俺のちんちんでオナナに変えるんだ……！！
「ああ！出る……優君出るよ……！！」
「いいくんたね♡ボクもいっっちゃうよ♡」
「一緒にイクよ優君！さあ俺のちんちんでイク！！」
「うん♡うん♡うん♡あっ♡あっ♡」
「うっちゅうっっっっっっっっっっっっっっっっ♡♡♡♡」



「あん……♡はあ……♡はにゃ……♡」
「なんたこの精液の量は……」
「未だかつて無いほどに射精してしまっただ……」
「優君大丈夫かい……♡平気？動ける？」
「あ……ちいじよぶらよに……♡」
「えへ♡ちよつとあたさまはーとしちゃった♡」

「えへへ♡いっばい出たねに……♡」
「ねえに……いっばい出た……♡」
「いっばい気持ちよかったってことだよ……♡」
「正直異常な状況に興奮したってのもあるけど……けど……いっばい……」
「あお優君……最高に気持ちよかったよ」
「優君のおま○こが良すぎて兄ちゃんのちんちん溶けるかと思ったよ」
「えへへ♡ちゃんと気持ちよくなってくれたんだ♡よかったあ♡」
「ぶふ♡に♡♡これボクとに♡は恋人……だね♡」



「えへへ♥まだおなかの中がボカボカしてるよ♥」
「優君 お尻とおま○こどっちが気持ちよかった？」
「えっ!? も…も…変なこと聞かなくてさ…」
うぐ…調子でのってしまった…優君怒らなう…
「はのちんちんだもん…どっでも気持ちいいよ…♥」
「ゆ…優君…!!!」
ああもう！天使で弟で且つ妹とか!!!
こんな素晴らしい存在をくれて神様ありがとうございます!!!



「そうだ優君！お風呂に入ろう！」
「え…か…お…お風呂…お風呂でまたするの…?」
「ちち…違うよ！ほろ！汚れた身体を綺麗にしてあげよう…」
「おと兄ちゃん 恋人同士のお風呂でイチャイチャするのが夢なんだよ…」
「お風呂でイチャイチャ…うん♥入る！えへへ♥入らささ♥」
「あ…でも…」
「ん？どうしたんだい優君？」
「ボク全然汚れてないよ…だっぺのせいえきだもん…♥」
「くふっ…!!!ゆ…優君…」
「さあ入ろう優君！そしてイチャイチャしまくらおう!!!」

「あんっ♡もおにい…これイチャイチャじゃないよお…♡」
「しかたないよ！優君の産まれたままの姿が可愛すぎるからー」
「も…もお…♡Kisのえっち…♡」
「あっ♡んにゃあっ♡Kisのなめなめ気持ちいいよ♡」
「おあもう我慢できな〜優君のツンツンエッチな〜」
「しなっって言ったけどツンツン優君…さうかな〜」
「もお…Kis…♡」

「約束破ってごめんよ…」
「怒らな〜優君…でも…」
「も…お…違っよKis…」
「僕のおま〇こほもっKisのなんだよ」
「だからKisがしたさな〜」
「う…もっ…ん…わ…い…ら…な…だ…♡」
「ん…優君…♡」



「あっ♡ あんっ♡ んにやああっ♡♡」
「なんれ？ あひっ♡ さっきよりなんかおま○さ♡」
「きもちいいよっ♡ にいそんなに激しくしないでえ♡」
「ためだよ優君！ 弟ま○こが気持ちよすき♡ 止まるなよ！！」
「もお♡ にい♡ もあ♡ しかたないんだからあ♡」

あひ

あひ

「ああ！ いよいよ優君っ！！」
「んっ♡ 僕もいよいよ♡♡」
「ああ！ 射精するよ優君っ！！」
「うんっ♡ 出してっ♡♡」
「優君っ！ 優君っ！！」
「にっ♡♡ にっ♡♡」

あひ

あひ





「はふう……♡ ポクの中にいていっばいだよ……♡」
「にいのせいえきお湯より温かいね♡ ほかほかするよ♡」
「ああもう！ 可愛いな優君は！ なてなてしちゃうよ！！」
「はにゃっ!? あっ……ふにいつ……!!」
「ど……どうしたの優君!? 大丈夫かい!?」
「あ……だいじよぶだよに♡ なんかお腹が……」
「お腹痛いのかい?」
「あ……もしかして兄ちゃんの精液のせい……?」
「んーん…… なんかお腹の中がざりゅってなって……」
「なんだろ…… 今までと違う感じ……?」
「ほう……♡ にい…… ポクちよつと変かも……♡」
「な…… なんだこの優君は…… 滅茶苦茶色っほいぞ……」
「それに匂いが…… さっさとちよつと違うような……」
「うお…… これだけで勃起してしまっそうだ……!」
「ねえにい……♡ お風呂もうあがろうよ♡」
「優君!? なんかフェロモン出してない優君!?」

「ねえにい… ボクねお腹の奥がキュンキュンしてるの…」
「それでね… にいのちんちんが欲しくなっちゃったの…」
「だからねにい… えっとね… またボクに… して♡」



ゆゆ… 優君が自分からおねたりですと…!!
なにこれっ!? もしかして俺今日死んじゃうのっ!?
「ねえにさ…♡ してねなさの…♡♡♡♡」
「するよー。しますー。しますもっ♡♡」
「もう優君がダメって言っても止まらなからねっ♡」
「うん♡ だよ♡ しますよ♡」
「ボクのおま〇が壊れるんさささっほろっお♡」

「あんっ♡きたっ♡にいのちんちんきたよぉ♡♡」
「ふにいいいい♡ちんちんが奥にあたってるとよぉ♡♡」
「そこらめえ♡ちんちんで♡ん♡ん♡しちゃらめえ♡♡」
「あっ♡んにっ♡んにゃあぁあぁあぁっ♡♡」



奥に当たってる!? これ…まさか子宮?
優君の子宮が出来る…♡♡
「にっ…♡♡ひらひらっ♡♡からっ♡♡」
「おなかのおくれなんかひらひらっ♡♡よぉ♡♡」
「優君それは子宮だよ!そこに精液を注いだら」
「兄ちゃんと優君の赤ちゃんが出来るんだよ!」
「あっ♡えっ!?あかちゃん…♡んっ♡」
「にいとボクの…あかちゃん…♡♡」



「あっ♡あっ♡あひひひひひひっ♡」
「あんっ♡あかちゃんっ♡あっ♡あかちゃんっ♡」
「射精すよ優君！優君の子宮の中に精液を！タツッリと！！」
「あっ♡でもっ♡あんっ♡にっ♡にっ♡もももも♡♡♡♡♡♡」



「うっの。。。ポクおとの子だよ。。。♡」
「にっのあかちゃん作ってもいいの。ほーっしはんじやなりの。」
「そっだね優君。。。男なのに。。。弟なのに妊娠とかおかしらね。。。」
「だからこそ最高じゃないかっ！！」
「優君は嫌なのかい？兄ちゃんの赤ちゃんはイヤなのかい？」
「やじゃないよお♡ほしい！にっのあかちゃんほしいよお♡」
「じゃあどうして欲しいんだい？優君の口からはっし言っ！！」
「ポクはおとの子らげとにっのあかちゃんがほしがるすっ♡♡」
「だからにっのせいえきをポクのしせえとにっのほしがるすっ♡♡♡」

Handwritten signature in blue ink.

Handwritten signature in blue ink.

「えへ…♡ にいっぱいだしだね…♡」
「しきゅうの中にのせいえきていっぱいだよ♡」
「ボクちゃんとびびせいできたかな…♡」
「も」デキでなくともデキるまで何度かもやるぞー」
「ぞっかあ…そんなだ…♡」
「じゃあびびせいでなくとも…いぢかなあ…♡」
「ん？もしかしてまだしたりなのから優君…」
「えあ…だって…にいとせうすしてたりなの…」
「にいがボクのご好きだってのが伝わってきいて…」
「お腹がボクボカして…幸せなんだもん…♡」



「今朝まで男の子だったのにもうちんこ大好きとか…」
「優君ほもう！エロすぎだよ！最強だよ！！」
「あつ…えつとなんだっけ…ぞうだ…♡」
「ご…ごうしたんだい優君…♡」
「ボクをこんなエッチにして…責任とってよねにら…♡」
「も…もあ!!そんなのどこ算えたの優君!!」
「取るよ責任！するよ何度でも!!今夜は寝かせなけりよ!!」
「えへへ♡ Ms…だめいすき♡」

「にっすこいね♥6回もするんだもん♥」
「兄ちゃんはもうカラッカラだけどね……」
「これだけしたらさっさとじりせいでいいよね♥」
「きゅんきゅんさー！ 楽しみだね優君！」

「あんなに可愛らしい妹の……」
「……ん？ 何なの？ 優君……」
「えっ？ あんなに可愛らしい妹の……」
「十月十日の……十月十日後……」
「じゃあその……お話を聞かせて……」
「ん？ ……」
「やっぱり大きいのかな？ ……もしかして女用から来るのかな？」
「コンコンするのかな？ ……寝る間に来るのかな？」
「え？ ……優君……お話を聞かせて……」
「もちろん「アウトリタロー」」
「マントが優君……」



終
「弟ちゃんパート」に続く

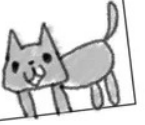
おと
弟
妹
いも

女体化した弟は

俺の弟で妹で恋人でそして嫁。



4月6日水 天気



今日いい天気だね。
 うさぎも元気だね。
 ちかちかお花畑。
 ちかちかお花畑。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。



4月15日土 天気

10月15日土 天気

今日いい天気だね。
 うさぎも元気だね。
 ちかちかお花畑。
 ちかちかお花畑。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。



今日いい天気だね。
 うさぎも元気だね。
 ちかちかお花畑。
 ちかちかお花畑。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。
 うさぎも元気だね。

ボクの名前は「優」です
好きな人は「い」……お兄ちゃんです
今日ボクは大変なことになるってしまいました
だから「い」に助けてほしくて「い」の部屋に来ました
はあ……「い」の部屋「い」の匂いがして落ち着くなあ……
あ……じゃなかった……

「「い」助けてえ……」
「どうしたんだい優君？」
「「い」コーヒー飲んでる やっぱりに「い」は大人だなあ
うん！「い」ならさっさと治してくれるよね！」
「「い」……僕……僕……」
「大丈夫だよ優君 落ち着いて」
「どうしよ……言っの恥ずかしいや……」
「でもちゃんとかわないと……」
「おな「い」したらオッパイが生えちゃったのっ!!」
「フ——ッ!!」

「ななな……なんだって優君!?」
「はわ……「い」がコーヒーを吹いちゃった……
やっぱり変なのかな……う、もしかして病気の……」
「白いおしっこが出たらね……おっぱいが……」
「と……取り敢えずおっぱいを見てみようか……」
「そっか見なきゃわからないよね……さすが「い」……」



「ね……おっぱいあるでしょ……」
「ご……」クリ……」

あう……にいがボクのおっぱいをジッと見てる……
毎日いっしょにお風呂に入って見られてるのに……
なんてだろ……はすかしいよ……

「ねえにい……僕病気なのかな……」

「大丈夫だよ優君！ 思春期は誰だってそうさ」

「兄ちゃんなんて巨カップになったもんさ！」

「そうなんだ！ よかったあ……」

そっかにいもそうだったんだ！ えへへ「いと」緒だあ

「優君……下の方はどうなってるのかな……」

「下っでおちんちん？ 見てないからわかんない……」

「そうかなら兄ちゃんも見てるから確かめてみよう」

「え……？ にいも見てるの……？ それほえつと……」

「……にいがボクのちんちんを見るなんて……」

「おっぱいだけでもはすかしいのににそんなの無理だよ……」

「これは診察です！ さあ優君 兄ちゃんに見せてみなさい」

「うう……にいはボクのこと考えてくれているのに……」

「ボクははすかしいだなんて……にいとめんね……」

「うん……わかったよ にい……」



「あう…… ちょっとだけ小さくなってるかも……」
「あも…… はやく診察終わってえ……」
「にいちんちん見られると…… 大っきなっちゃうよあ……」
「小さくて分かりづらいけ…… 優君もしかして勃起してる？」
「はわ…… ぼ…… パしちゃった……」
「そ…… それは…… にいが…… 見てるから……」
「え？ 俺が何？」
「もあ…… そんなのいいでしょ！ にいのバカ……！」



「ねえにい…… もうパンツはいてもさ……」
「それをしようなんてとんでも無いー」
「じゃなくて…… えっと……」
「よし優君！ オナニーをしてみようー」
「えけあ…… おなにい…… な…… なんて……」
「おっばい出現の条件がオナニーかどうかを調べるには」
「もう一度オナニーをするのが一番なんですよ優君ー」
「だから別に兄ちゃんが見たいってわけじゃないよ……」
「実験と検証なんだよ優君！ だからさあオナニーをー」
「さあ！ 兄ちゃんが見ておけるからー さあー さあっ！！」
「そ…… そっかあ…… なるほどさすがにさー」
「意味は…… ちょっと長くわかんないけ……」
「うん…… わかったよ…… 僕のおなにい見せてねさ……」

あう…おなにしているところに見られる…
にいの目すごい真剣だよ…かっこいいな…
はあ…にいの手大きいなあ…
あの手でちんちんさわられたら気持ちいいんだろうなあ…

「ん…あ…あんっ…」
「優君の声まるで女の子みたいだねえ…」
はう…声出ちゃってた…
あう…はずかしい声に聞こえちゃった…
「おちんちんそんなに気持ちいいのかい優君？」
「にいに見られてるのが気持ちいいとか言えないよあ…」
「優君はいつも何をオカズにしているんだい？」
「おかず？好きなオカズ？えっとハンバーグ…？」
「でも…おなにいと関係ないよね…？」
「オナニーする時は何を想像しているのかな？」
「えっと…それは…にいの…」
はう…言っちゃった…にい変に思ったかなあ…
「なら優君、右手を兄ちゃんの手だと思ったいよ」
「そして兄ちゃんのことを呼びながらするんだ」
「そしたらもっと気持ちよくなるから」
はあ…さっき考えてたことばれたのかな…
「にいつて…もしかして超能力者…」



あっ……にいの手って思ってたんですけど……
もっとすごいこと考えたらもっと気持ちいいのかな？
えっと……にいに見られながらにいの手でされる……
あっ……これすごい……じゃあえっと……
にいのちもーきれながちんちんをまわってもあう……
にやっ……白くおしっこ出ちゃうんですけど……！！

俺の弟が
萌え萌え可愛いの

にいが……ボクのおっぱいにちやう……
あひやっ！これすごい……！！
「んっ……にい……にいすきさ……」
「ひ……優君っ！！」
あ……すごい思いついちゃった……
にいとボクがちんちんをまわって……
ああっ！ダメっ！それですげえっ！！
にいのちんちんすごいよっ！！
「あっ！にい……ちやうよ……」
「あっ！あんっ……にいのちんちん……」
「え……ち……ち……優君の……」
あー！白くおしっこ出ちゃう……
にいのちんちんからも出るよ……
にいの白くおしっこ……あう……あう……
ダメっ！てるっ！ちやうよ……
「んんっ……！！」



はぁ… いっぱい出ちゃった… 白いおしっこ…
「はぁ… ちんちんから出すのかなも…?」
「いっぱい出したね優君 気持ちよかったのから。」
「うん… 色が見てたからかな…?」
「いつもよりおしっこいっぱい出ちゃった…?」



「それにしても優君… オナニ… なんてとて覚えたんだいっ。」
「えっとね… クラスの女子のたなかさんに教えてもらったんだ。」
「好きな人のことを考えながらちんちんをこすすしたらいいって…。」
「こすすがよくわかんなかったからくんにくにしてるの… 変かな?」
「変じゃないさ… 優君らしくてすごくかわいかったよー。」
「か… かわいい…? ボクが…?」
「えへへ… 色に可愛いっていわれちゃったあ…?」

「おっぱいの大きさを変わらなかったねに……」
「そうだね……残念だね優君……」
「いしが落ち込んでる……おっぱいあるのイヤなのかなあ……」
「にいがめんね……にいのベッドおっして汚しちゃった……」
「全然構わないよ優君！優君が出した物に汚い物なんて無いからね！」
「言うか兄ちゃんむしろ飲みたいくらい……」
「え……にいボクの白いおっして飲みたいの……」



「白いおっして飲むの……あ……んも……」
「どうしよ……にいのおなに想像しちゃった……」
「ボク……にいのなら飲むかも……ううん飲みたいかも……」
「ん……どうしたんだい優君……」
「にいもおなにしたら白いおっして出るんだよね……」
「そりやあもちろん！優君の10倍は出るわっ!!」
「そんなに!? にいすい……やっぱりにいは凄いわっ!」
「ボクね……ちょっとだけ想像したの……」
「にいがおなにいで白いおっして出してるト……」
「ボクもちょっとだけ……飲みたいかなって……思ったかも……」
「まじですか優君!? じゃあ飲もう！直接飲みましようっ!!」
「えあ!? ちよくせつ!? にいのちんちんからそのまま飲むの……」
「そうです！兄ちゃんのちんちんを咥えて直接飲むのですっ!」
「にいのちんちんをボクのお口で……くわえる……」
「はわわ……にいのを……そんなの……うい……かな……」

に…にのちんちんが目の前に…す…すこい…大きい…
「はわ…にのちんち…えっと…どうしたらいいのに…」
「そうだね優君…すは舐めてみようか」
にのちんちんをなめる…どうしよ…すごいキドキする…
ちんちんなめるなんて変なはずなのに…全然やじやないや…
あ…これにの味だ…なんてだるにの味って気がする…
「いよ優君…兄ちゃんのちんちんはどんな味だい？」
「えっとね…なんだろ…にの味って感じかなあ？」

俺の弟が
萌え萌え可愛

「それじゃお睨えてみようか優君…さあさあ」
「う…うん…やってみる…」
にのちんちんをお口に…はう…てきるかなあ…
これっておなにいなのかな？ お口おなにい？
うう…大きすぎてお口に入りきらないかも…
んっ…でもがんばらなきゃ…
ぜったいにに気持ちよくなってもらうんだもん！」



おん

ん…なんかいいのちんちん美味しいかも……
はあ…お口おなにいくせになっちゃうぞ……
「ねえにい…ちゃんときもちいいい……」
「勿論気持ちいいよ……ちんこが溶けそった……」
「いいが気持ちよくなってる！すげえわれじりー」
「えへへ…もって気持ちよくなってるね……」
「うあ…そんなこと言われたら優君……!!」
「うわ！今のいい可愛かった♡こう言ったらいいのかな？」
「ふふ♡気持ちいいのいい？気持ちよくなってるね……♡」

俺の弟が
萌え萌え 必然

「優君…優君…精液…」
「せえええ…白くおじり……」
「ん…ん…のせえええ……」
「優君！無理だったら離れようか……」
「ん…ん…ちんちんが……」
「あー！ちんちんが……」
「きたー！このせえええお口に……」
「すげえ！この味が中に広がってる……」
「あまため…お口に……」

うわ



「あう……ちょっとごぼしちゃった……」
「せつかくにいが出てくれたのに……」
「ごめんねにい……全部飲めなかった……」
「十分だよ優君!! よく頑張ったね……」
「不味かったらベツしてくれていいんだよ」
「ああ……にいがなでなでしてくれて……」
「にいの手大きくってきもちいいなあ……」
「やっぱりにいは優しいなあ……」

「えへへにいのなでなで大好き……♡」
「ねえにい……ちんちん気持ちよかったなら」
「ボクまたお回おなにいしてあげるよ……」
「うう……優君……君って子は……!!」
「そしたらにいまたなでなでしてね……♡」
「実は優君もっとなでなでしてあるのです」
「それはちよっと痛いかもしれませんが……」
「痛いの……? でもにい気持ちいいんだよわ?」
「にいが嬉しいことなら……ボク頑張れるよ!」



んひゃっ!? なな... なに!? これなに!? 何が起ったの!?
なにが入ってきた... えっ!? まさかこれっておしりの穴...!?
うそ... にいの指がボクのおしりの穴に入ってる...!?
「優君はお尻の穴まで可愛いねえ」
「優君 お尻 気持ちいいかい?」
「にいの指が太くおしりがジーンンンして気持ちよくなって...
あう... でもそんなのはすかしくって言えないよ...」
「これからね 優君のお尻の穴」
「兄ちゃんのちんちんを挿れるんだよ」

んひゃっ

んひゃっ

ええええええええっ!? にいのちんちんをお尻に!?
「だからちゃんと入るようになんてしてんだよ」
「ほほ... ボクのおしりの穴にちんちんを...」
「にい... ボクのお尻でおなににするの?」
うそ... どうしよ... お尻おなにいなんて...
お口もちよっと気持ちよかったのに...
「違うよ優君 これからするのはセックスだよ」



「せつくす…おなはいとほ違ひの…」
「セックスはね好きな人同士でする愛の行為なんだよ
好きっ!? にいがボクのことを…好き…
分かるかい? ちんちんがお尻の穴に当たってるの」
あう…当たってるだけなのに気持ちいいよ…
「兄ちゃんは今 優君への大好きって気持ちを全部」
「ちんちんに込めているんだ それを優君!」
「お尻の穴で全て受け止めて欲しいんだ!!」
「え!? ええええええええっ!?」

hahoban

「えあ…でもに…これって多分えつと…」
「よく分かんないけどイクナイと…だよね…」
「正直そうです! 兄弟でしちやダメなとです!!」
「そ…そうだよね…でも…にいはしたいの…」
「うん! ずっと前からしたいって思っていました!!」
「…ん…そっか…そう…なんだ…」
「にいボクとしたいと思ってたんだ…そんなの…
ダメなんて言えない…欲しいって思っちゃう…
「にい…ボクもね…大好きだから…」
「だから…いよいよ…」



「ほら優君わかるかい？」
「兄ちゃんのちんちんが優君のお尻の穴とキスしてるよ」
あう…にいのちんちん熱くておしりとけちゃうぞ……
てもいいのかな？ 気持ちいいけど…いいのかな？ こんなの……
「ねえにい…ほんとにおしりに入れちゃうの……？」
「こんなのしていいの？ おまわりさんに怒られちゃう……」
ふにやっ！ ちんちんがおしりの穴をひらいてるっ……!!
だめこんなの……おしりの穴がわれちゃうよ……
「ふにい……！ おしりの穴ひらちゃうよにい……」
「例え逮捕されようと兄ちゃんはやめませんっ!!」
はうっ♡ にい男らしい……！ かっこいい……！



ああ……にいのちんちんが入ってる……♡
からだの中ちんちんが入ってる……
にいがボクの中に！ すこい……すこいよあ♡
「ゆ……優君 大丈夫かい？ いけそう？」
「んっ……えへへ……だいじよぶだよにら……」
「にいのちんちんでお腹一杯だけ……平気だよ……」
「これから動かすからもっときついけど大丈夫かい？」
「うん……こんなの初めてだけどだいじよぶだよ……」
「えへへ……だつて……にいのちんちんだもん……♡」
「ごめんね優君！ 兄ちゃんもう止めらそうにない!!」
いいよにい♡ いっぱいボクで気持ちよくなって……!

あま

あま♡



はにゃっ♡だめえ♡なんか変……♡
あたまがふわふわしておかしいよ♡
なんか来ちゃう……♡変になっちゃう……♡
おしりちゃんにこわされちゃう♡
「優君イクのかい？イクんだねっ」
「くっつてなに？あっ♡きっちゃうっ！！」
「兄ちゃんももうすぐイクから……」
「あとちょっとだけ我慢してね……」
「そして一緒に……！！」

そっかこれが「イク」なんだね……♡
「にもいくんた……ボクのおしり♡
どうしょ……すんすんれしよあ♡
あっ♡きもちののがすんすんた♡
「おがボクっすん♡ボクがヌッスん♡
「よしーイクよ優君ー一緒にヌッスん♡」
うん♡いっ♡ボクでヌッ♡
ボクもすっのきちゃう……♡ヌッ♡
「優君大好きだよ！！」
「うん♡ボクも♡にがららすっ♡」

「んー ぬっぬっ」
「ヌッヌッ♡おののぬっぬっ♡
ヌッヌッ♡ヌッヌッ♡おののぬっぬっ♡
「ぬっぬっ♡ヌッヌッ♡ヌッヌッ♡」

Fn

ぬっぬっ

はう……♡ 正しいのせいえきておしりの中たぶたぶだよ……♡
なんだろ……♡ 正しいがボクを大好きって気持ちがおなかにいっぱいで……
はあ……♡ すごい幸せ……♡ 正しいのちんちんってすごいなあ……♡
「……ごめんね優君……」
え……♡ なんて？ なんて謝るのには……♡
「我慢できずに優君を泣かせてらびわるもじやう……」
「らいじよぶらよに♡ 正しいの気持ちほわかってるよ♡」
「今ボクの中はね♡ 正しいの大好きれいっばいなんちよ♡」
だからに悲しそうにしないでね……♡ ボクは幸せだからね♡

「じゃあ抜くよ優君……」
あう……♡ ちんちん抜いちゃうんだ……♡
ずっといれててくれてもいいのになあ……♡
「優君のお尻の穴最高に気持ちよかったよ」
よかった!! 正しいも気持ちよかったんだ♡
ボクのおしりて正しいが最高に気持ちよく……♡
えへ♡♡ うれしすぎて泣いちゃうやうだよ♡
「んへ♡♡ えへへ……♡♡ よかったも……♡♡」
「……ん……あれ……♡♡ えっ……♡♡」
「どうしたのには……♡♡ またするの……♡♡」
「もちろんしたらいけ……♡♡ じゃなく……♡♡」



♡
♡
♡

「優君のちんちんが…無いつ…!!」
「えあっ!? ほ…ほんとだ…!?」
「ち…ちんちん無くなっちゃった…」
「おえに…と…どうしようも…」
「おっばいもまた大きくなってるじ…」
「はわ…あう…に…に…に…」

ど…どうしよ…ちんちん無くなっちゃった…
ちんちんが無くなったってことは…えっと…
あれ…? ポクおしことうやってするの…?
あう…もうポク「生おしこ」できなげよ…
「えうと…優君落ちて着い…」
ほう…おちくつてなんだっけ…うんど…
あーちんちんが落ちたってことかな…?
ポクどこかにちんちん落としちゃったのかな…?
ああ…違う…そうじゃないよ…
「よし! 優君!」
に…ちんちん見つけたの…?
「取り敢えずこれを着ましようっ!!」



ええっけなにこの服っけなんか可愛い服だけども…
なんてにいこんなの持ってるの…？カノシヨさんのかな…
そうだよね…にいかっこいいもん…」イビトいるよね…
「ボク男の子だよ…こんなの変だよお…」
「優君はおっばいがあってちんちんが無いんだよ！」
「もう優君は女の子なんだよ！だから変じゃないよ!!」
「かもしれないけど…でも…カノシヨさんの服なんて…
似合ってるよ優君！可愛さ倍！いや百倍だよ!!」
「ん…でもお…お…やっぱ脱いでい…」



「だつてこれ…にいのカノシヨの人の服でしょ…」
「え…やんや…えや…彼女…」
「こんなの持ってるってことは…そうなんだよね…？」
「ボク脱ぐ…こんなの…やだもん…」
「いやいや！いないから！恋人とか彼女とかいないからね!!」
「うそ…だつてにいかっこ良くて優しいもん…絶対いるもん…」
「いるわけ無いよ！兄ちゃんが好きなのは優君だけなんだから!!」
「うそ…にいがボクのことだけを…好き…」
「えうっ…に…ほ…ほん…」
「本当だよ！この服は優君に着せたくて買ったものだよ！」
「優君が女の子になって兄ちゃん超ラッキーだと思ってるのよ！」
「て言うかこれでお嫁をお嫁さんにできるとか思ってるんかいだよ!!」
「ボクがにのお嫁さん…？そんなのステキすぎだよ…」

「優君 ちゃんとパンツも履いたのかな？ スカートをめくって見せてもらえん」
「ん…これいいのにな…」
「おんなの子のパンツをはくだけでもドキドキするのにな…」
「いが見てる…ボクのおちんちんが無くなったおそこを見てるよ…」

ドキ

ドキ

ドキ



「凄く似合ってるよ優君…超かわいらし
か…かわいら…ほづ…♡
えけなに今の？ お腹の奥がキュンってなった
」あれ？ 優君少し濡れてきたねえ…」
「え…？ めれるってなあに…」
「優君がエッチな気持ちになっただってことだよ
」かわいって言われて嬉しかったのかな？」
「それともパンツを見られて興奮してるのかな？」
あうう…両方ばれちゃってるよ…
いいエッチな子キライだったらどうしよ…
めれちゃダメ…めれちゃダメ…」

「おう…！なにしてるのい…!? ちんちんめないてえ…!」
「いーがちんちんめなめてる…!? いーがボクのちんちんを…♡」
「ちんちんじゃないよ優君…ここはおま○こだよ」
「おま○こ…? なんたる…すぐドキドキするエツチな言葉…」
「優君のエツチで敏感なおんなの子の部分だよ…」
「いーがぼくのおま○こを…おんなの子の部分を…♡」



「いーの舌でボクのおま○こ…バターみたいにとかされちゃう♡」
「こんなの気持ちよすぎてめれるの止められるはずないよお…♡」
「はわっ! いーがボクのおしっこ飲んでる!? いーがボクのを…♡」
「んにゃっ♡ やだいー…ボクのおしっこ飲んでじゃだめだよお…」
「これは優君のエツチなお汁だよ…溢れて止まらないね…」
「優君はエツチでイケナイおとこの子だったんだねえ…」
「だっただって…いーになめられたらそうなっちゃうよお…♡」
「いいんだよ優君 いっばい濡れないと兄ちゃんのちんちんが入らないからね」
「う…うそ…いーのをボクのおま○こに…? おしりの穴みたいにい…?」
「優君のおま○こに兄ちゃんのちんちんを挿れて恋人セックスするんだよ!」
「ボクといーが恋人!? はうっ♡ またキュンってなっちゃうだよお…♡」



「優君のいかにセックスをするか...」
「うん... いよいよ...」
「いと恋人セックス...」
ああ... ボク絶対いっばいぬれてるよ...

「初めての恋人セックスは痛いけど我慢できるかな...」
「せつすてきたらボク... いと恋人になれるんだよ...」
「だってボク... 痛いのなんて我慢できるよ...」
「うん...」
大丈夫だよいと... きつと痛くなんてないんだから
だっていとちんちんだもん... 痛いはすまないよ...
それにね... ちんちんが欲しいって...
ボクのおま〇が言ってる気がするんだ...」

「優君のおま○こにちんちんを……」
「えへへ……なんかドキドキするね……♡」
「いに下ドキが聞こえちゃってるかも♡
はやくきて♡ いに全部をいれて♡」



「辛かったら止めるからね……我慢できなかつたら言うんだよ」
「えっとねに……その……おま○こ……」
「出来たばかりだから……よく分からないけど……でもね……」
「ボクはにいのことが大好きで……にいの全部が大好きで……」
「だからね……ボクのおま○こも絶対いにちんちんを好きになるよ♡」
「ボクは平気だよ♡ だからにいはいっぱいいっぱい気持ちよくなってね♡」
「優君……もぉー力手て天使なんだからー」
「大好きだよ優君……にゃあにゃあ優君……」
「うん♡ にゃあ……♡」
「あ……にゃあにゃあ♡ にゃあにゃあ♡のちんちんがボクのおんなの子の中に……♡」

ああっ♡にいのちんちんがはっつてっ♡
ちんちんからたをこじ開けられてるよ♡
「大丈夫かい優君？ 平気？ いけぞう？」
「だいじよぶだよ… にい… ちげろ…」
「痛くないけろ… なんかわになりそ…」
「頭のなか… にいとちんちんちげれ…」
「ほかのが無くなっちやいそなの……」
にい♡ちんちん♡ にい♡ちんちん♡
ああだめえ♡ 他のこと考えられないよあ♡

「ぞわっつらんだよ優君」
「おま○に集中して兄ちゃんだけを感じればいらんだ」
「うん♡ わかったよにい…♡ セックス続けろ…」
「それでボクの中をにいつらっほらっしてね…」
「するよ優君！ 優君を兄ちゃんの物にするからね」
「ボクがにいの物に…♡ ほっつ♡ ステキすだよ♡
「よし！ 動くんよ優君」
「うてにい♡ ボクのせんぶをにいの物にしてえ♡



「あんっ♡ にいがボクの中に入ってるよぉ♡
ちんちんがおま○この奥に当たってるっ♡
おま○こを」ん」んってノックしてるっ♡
「はにい♡ にいのちんちんおおきすぎりよぉ♡
はあ♡ ちんちんであふれちゃいそうだよぉ♡
「からちの中…ちんちんれいっばいらよぉ♡
はうう♡ おま○こがキゅんキゅんしちゃうっ♡
ボクのおま○こにいのちんちん好き過ぎだよぉ♡

「そんなに気持ちいいのかい優君!? 兄ちゃんのちんちんが…!!」
「うんっ♡ きもちいいよぉ♡ ちんちんのちんちんらもん♡」
「やっばりボクのおま○こは♡ にいのちんちん好きなのよ♡」
「にい♡ すき♡ らいすき♡ にいのちんちんらいすき♡」
「もぉ! 優君は! 純粋なのにH回とか! このイケナイ子め!」
「うん♡ ボクいけない子なの♡ ちんちんらとちんちんめっ♡ してえ♡
いっばいめっ♡ にい♡ ちんちんでおま○こをいっばい叱ってえ♡



10/2 ♡

10/2 ♡

はにゃ...♡しゅんしゅん...♡
ボクの中にいっしょにいられたよ...♡
からだの中全部にいっしょにいられたよ♡
あも...♡これがこの物になるってことなんだ...♡
「優君大丈夫かい...♡、平気？動ける？」
「あ...♡うん、大丈夫だよ...♡」
「えへ♡ちょっとまたまはーとしちゃった♡」

「えへ♡いっしょにいられたよ...♡」
「あえに...♡いっしょにいられたよ」
「いっしょに気持ちよかったってことだよ...♡」
「あ優君...♡最高に気持ちよかったよ」
「いっしょにボクのおま○で気持ちよく...♡はう...♡しあわせだよ♡」
「優君のおま○が良すぎて兄ちゃんのちんちん溶けるかと思ったよ」
「ボクも溶けちゃったよ♡いっしょにいっしょ♡ふふふ♡うれしいな♡」
「ふふ♡いっしょ♡これでボクといっしょは恋人...♡だね♡」



「えへへ♥まだおなかの中がホカホカしてるよ♥」
「優君 お尻とおま○こどっちが気持ちよかった？」
「えっ!? も…も…変なこと聞かないでよ…」
「そんなの両方ともすっごく気持ちよすぎて…」
「どっちかなんて決められるわけないよお…」
「にのちんちんたもん…どっちも気持ちいいよ…♥」
「ゆ…優君…!!!」
「あう…選べなかったよお…ホクってゆっぴーぶたん…」



「そうだ優君！お風呂に入ろうー」
「お風呂？お風呂にするのかな…あう…想像しちゃった…♥」
「え…お…お風呂…お風呂…お風呂…」
「ちち…違うよ！ほら！汚れた身体を綺麗にしようよ…」
「おと兄ちゃん 恋人同士の風呂にイチャイチャするのが夢なんだよお…」
「そっかお…しないんだ…あ…でもイチャイチャもスナキかも…♥」
「お風呂でイチャイチャ…うん♥入るーえへへ♥入るよ」
「あ…でも…」
「ん？…」
「ホク全然汚れてないよ…だりてはのせえええええ…♥」
「ん？…」
「あお入ろう優君ーそっかイチャイチャしまんねー」
「やったお♥にとお風呂でイチャイチャ♥」



「おんっ♡もおにい…これイチャチャじゃないよぉ…♡」
 やっぱりするんだぁ♡ しないで言ったのに♡ えへへ♡
 「しかたないよ！ 優君の産まれたままの姿が可愛すぎるからー」
 お風呂でなめなめされたらお湯が入っちゃう♡ ほかほかだよぉ♡
 あぁ… ちんちんいれてほしい♡ 入れてくれないかな♡…
 「ああもう我慢できなさいー 優君♡♡♡♡♡」
 「しなびって言ったけど♡♡♡♡♡ 優君♡♡♡♡♡」
 「もお…♡♡♡♡♡」
 にい♡♡♡♡♡ ちんちんしてくれる♡

「約束破ってごめんよ…♡」
 「怒らなさい優君…♡♡♡♡♡」
 「も…♡♡♡♡♡」
 「僕のおま○はも♡♡♡のなんだよ」
 「だからおま○がしたらな♡♡♡」
 「いっ♡♡♡♡♡」
 「うっ…♡♡♡♡♡」
 うっ…♡♡♡♡♡ 優君…♡♡♡♡♡
 ふふ♡♡♡♡♡

はぁ♡ にいてボクの中いっばい♡ しあわせだよ♡
にいのせいえきほかほかしてあったかいや♡ えへ♡
「はにやっ!? あっ… ぶにゅっ…!!」
「ど… どうしたの優君!? 大丈夫かい!?」
「あ… だいじよぶだよに♡ なんかお腹が…」
「お腹の中で何かふくらんでる…!? なにこれ…?」
「お腹痛いのかい?」
「痛くないよに… ボクの中に何か新しいのが…」
「あ… もしかして兄ちゃんの精液のせい…?」
「違うよに… にいのせいえきは大好きだよ…」
「んーん… なんかお腹の中がぎゅゅってなってる…」
「なんだろ… 今までと違う感じ…」
「あ… あれ!? なんだろ… なんか変な気持ち…」
「はう…♡ にい… ボクちよっと変かも…♡」
「どうしよすっごくにいのちんちんが欲しいよ…♡」
「お腹の奥がうすうすするう♡ せいえきほしいよ♡」
「ねえにい…♡ お風呂もうあがろうよ♡」
「お風呂じゃだめ… ペッドで何度もしてほしい…♡」
「どうしよボク… こんなこと思うだなんて…」
「すこくエッチな子になっちゃったかも…」



ああああっ♡にいのちんちんがきたあ♡
にいが後ろからするのすこいよあ♡
ちんちんがおま○この奥までとどいてるう♡
さつきよりもっとすつと奥まできてるよあ♡
はうう♡なにこ♡さつきまでなかったのに♡
ボクの体の中になんか新しいのがきてるよあ♡
でもここ♡ちんちんがすっほりおさまってるっ♡
回みたいなのがちんちんに吸いついてるう♡

ここすこいよあ♡なんかきちやうよあ♡
体がひらいちやう♡おま○がひらいちやう♡
「にい…♡ひらいちやうからあ…♡」
「おなかのおくれなんかひらいちやうよあ♡」
「優君それは子宮だよ！そこに精液を注いだら」
「兄ちゃんと優君の赤ちゃんが出来るんだよ！」
「にいとボクのおかちゃん!? そっかあ♡」
だからせいえぎほしいって思ってたんだあ♡
せいえぎほしいよあ♡あかちゃん欲しいよあ♡



あかちゃんほしい♥でも♥ほくおとこの子なのには
あかちゃんなんてつくったらい怒られちゃうよ♥
たいほされちゃうよ♥そんなのやだよ♥
「射精すよ優君！優君の子宮の中に精液を！タツプリと!!」
「あっ♥でもっ♥あんっ♥にっ♥でも♥」



「にっ♥でもっ♥ポクおとこの子だよ♥」
「にっ♥あかちゃん作ってもいいの♥ほーりっいはんじゃなの♥」
「そうだね優君♥男なの♥弟なの♥妊娠とかおかしお♥」
「だからこそ最高じゃないかっ!!」
「いいの? あかちゃん作ってもいいの? そっか♥いいんだ♥
「優君は嫌なのかい? 兄ちゃんの赤ちゃんはイヤなのかい?」
「やじゃないよ♥ほっしい! にっ♥あかちゃんほしいよ♥」
「じゃあどうして欲しいんだい!? 優君の回からはっきり言っ!!」
「ポクはおとこの子らけとにっ♥あかちゃんがほっしいれすっ♥♥」
「だからにっ♥のせいえきをポクのでさっうにっ♥ほっしいれすっ♥♥」

あ

あ

「えへ…♡ Eスっばいでしたね…♡」
「しきゅうの中にいのせいえきていっばいだよ♡」
「ボクちゃんとじゆせいできたかな…♡」
「もしデキてなくてもデキるまで何度でもやるぞー」
「そっかあ… そうなんだ…」
「またしてくれるんだ… それなら…」
「じゃあじゆせいできてなくても… いかなあ…」
「ん？ もしかしてまだしたりないのから優君？」
「えあ… たって… Eいとせつくすしてたりその…」
「Eいがボクのこと好きだったのが伝わってびびる…」
「お腹がボクがボカして… 幸せなんだもん…」

「今朝まで男の子だったのにもうちんご大好きとか…」
「優君はもう！ E回すぎだよ！ 最強だよ！！」
「えへ♡ やったあ♡ 最強だよ♡ ぶぶぶ♡」
「あっ… えっとなんだっけ… そうだ…」
「ど… どうしたんだい優君…」
「ボクをこんなにエッチにして… 責任とってよねEス…♡」
「も… もお!! そんなのどこで覚えたの優君!!」
「取るよ責任！ するよ何度でも!! 今夜は寝かせないよ!!」
「えへ♡ Eス… たぬすた♡」
「朝になるまでいっばいっばい♡ Eス♡」





10月3日
 1. 女の子がダンスを踊るのを見て、男の子はびっくりした。
 2. 女の子は元気よくダンスを踊った。
 3. 男の子は女の子のダンスを応援した。
 4. みんなで楽しそうにダンスをした。
 5. 女の子はみんなの笑顔を見て嬉しかった。
 6. 男の子は女の子のダンスを褒めた。
 7. みんなで仲良くダンスをした。
 8. 女の子はみんなの応援をありがとうと言った。
 9. 男の子は女の子のダンスを覚えて帰った。
 10. みんなで楽しい時間を過ごした。



11月3日
 1. 女の子が黒いドレスを着て、赤いリボンをつけて、大声で叫んだ。
 2. 男の子は女の子の叫び声にびっくりした。
 3. 女の子はみんなの前でダンスをした。
 4. 男の子は女の子のダンスを応援した。
 5. みんなで楽しそうにダンスをした。
 6. 女の子はみんなの笑顔を見て嬉しかった。
 7. 男の子は女の子のダンスを褒めた。
 8. みんなで仲良くダンスをした。
 9. 女の子はみんなの応援をありがとうと言った。
 10. 男の子は女の子のダンスを覚えて帰った。
 11. みんなで楽しい時間を過ごした。



12月3日
 1. 女の子と男の子が手を取り合って、動物たちと一緒にダンスをした。
 2. みんなで楽しそうにダンスをした。
 3. 女の子はみんなの笑顔を見て嬉しかった。
 4. 男の子は女の子のダンスを褒めた。
 5. みんなで仲良くダンスをした。
 6. 女の子はみんなの応援をありがとうと言った。
 7. 男の子は女の子のダンスを覚えて帰った。
 8. みんなで楽しい時間を過ごした。



1月15日
 1. 女の子が黒いドレスを着て、赤いリボンをつけて、みんなの前でダンスをした。
 2. 男の子は女の子のダンスを応援した。
 3. みんなで楽しそうにダンスをした。
 4. 女の子はみんなの笑顔を見て嬉しかった。
 5. 男の子は女の子のダンスを褒めた。
 6. みんなで仲良くダンスをした。
 7. 女の子はみんなの応援をありがとうと言った。
 8. 男の子は女の子のダンスを覚えて帰った。
 9. みんなで楽しい時間を過ごした。

HAPPY END



おと いも
弟妹

女体化した弟は
俺の弟で妹で恋人でそして嫁



















